Family in the Moonlight　～月華の家族～

伝説・改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｍｉｌｙ ｉｎ ｔｈｅ Ｍｏｏｎｌｉｇｈｔ ～月華の家族～

【Ｎコード】
Ｎ２８４４Ｎ

【作者名】
伝説・改

【あらすじ】
けいおん！Ｆｒａｇｍｅｎｔの１０年後。
英樹は結婚記念日に妻の梓と共に、ある事を思いだしていた。
自分のプロポーズ。そして、娘の咲が生まれた時の日を。

本作は鮮血の刻印先生の小説「けいおん！Ｆｒａｇｍｅｎｔ」完結記念小説です。
（鮮血の刻印先生には許可を得ています）

（前書き）

本作は、鮮血の刻印先生の『けいおん！Ｆｒａｇｍｅｎｔ』の未来を勝手に想像して書いた『ファンフィクション』の『ファンフィクション』です。

鮮血の刻印先生ではなく、別作者が作ったものなので多少違和感を感じるかもしれませんが、その辺は笑ってごまかしてくれれば幸いでございます。

灘宮英樹、２８歳。職業、科捜研。
俺のプロフィールを全体で表わすとこんな感じだ。どうだろう？普通だろ？
……普通ではないか。いや、正直どうなのだろう。これぐらいの人なら現実にいるだろう。
ってそんな事はいいんだ。俺は今、夜の道を疾走している。どうしてか？簡単だ。
もうすぐわかるよ。

「梓ッ！！」

自宅の玄関の扉を開けて、リビング兼食卓へダッシュ。
そこには、怒ってると言うか、無表情な妻の姿が。
「……ただいま」
「おかえりなさい。英樹さん」
……完全に怒ってる。声で分かる。
もう何年も付き合ってるんだ。それぐらい一瞬で読める。
さて、どうして梓が怒っているのか。
何故なら――。
「……結婚記念日に堂々と遅刻するなんて、流石英樹さんですね」
「どうも……」
その言葉通り、今日は俺と梓の結婚記念日だった。
なのに俺は見事に仕事で家に帰るのが遅くなり、結局１１時帰りだ。
……今日の朝、出るときに『早く帰る』と言ったのが間違いだった。
なんて事をしたんだ俺は。
「……まあ、別にいいです。仕事ですもん、仕方ないです」
「すまなかった。本当に……」

「それに、まだ11時です。まだ記念日ですよ」
「そうだが……、本当に悪かった」
俺は素直に床に正座して頭を下げる。
梓は立ちあがり、俺の目の前に座りこんだ。
「だからいいですよ、もう怒ってません」
「怒ってたのか」
「あ、当たり前です！出来たら、もっと早くに帰ってきてほしかったのに……」
顔を赤くして、横を向きながら言う梓。
くすっと笑いながら、俺はそんな彼女を、心の中で可愛いと思いながら、テーブルの上にある料理を温めなおす梓を手伝った。
「いいですよ、その前に英樹さんにはやらないといけない事がありますよ？」
……ああ、そうだった。
梓の他にもうひとり、怒ると機嫌を直すのが大変な子がいたんだ。
「そんな事を言う人には夕食抜きです！」
「冗談だよ、梓」
「もうっ……」
そして俺は、テーブルにうつ伏せで眠っている小さな女の子の元に静かに歩み寄り、傍に座る。
……灘宮咲（さき）。現在４歳。俺こと、灘宮英樹と、妻の灘宮梓の間に儲けた子供だ。
当然と言うべきか、髪が短い梓。つまり梓似。だが性格的にはなんとなく俺にも似ている。まあ基本（ベース）は梓だが。
「咲」
小さく呟くと、その小さな瞳が、ゆっくりと開く。
起き上がり、目をこすり寝ぼけ顔でこっちを見る。
「……おとーさん……？」
「ただいま。ごめんな、遅くなって」
「ううん、おとーさんおしごと、いそがしいんだもん」

やっぱり梓に似ている。そう感じた。
頭を撫でてやり、俺の膝に座らせる。
「おとーさん、まいにちおしごとごくろうさまです」
まさか４歳の娘にそんな事を言われるとは夢にも思わなかった。
俺は優しく微笑み、小さな体を優しく抱きしめる。
「ありがとう、咲」
「二人とも、ご飯ですよ」
丁度のタイミングで、梓が料理を乗せた皿を持って現れた。
それが全部テーブルに乗ると、三人はテーブルの近くに集まり……、
「じゃ、食べようか」

「「「いただきま～す！」」」

かなり遅めの夕食の後、家族３人で風呂に入って、床に敷いた布団で寝るだけ。
それにしても、危うく風呂の中で吐血するところだった。未だにあの体質は治ってないからな。
咲はもう既にお休みになられており、彼女を間に俺と梓が寝る。
電気を消して、寝ている咲の姿を梓と俺は見つめていた。
規則正しく、枕に抱きついて咲はぐっすり眠っていた。
「ホント、よく寝ますね、咲」
「そうだな。誰に似たんだろうな」
「……」
「……悪い、冗談だ」
最近、血は繋がってないが、妹と結婚したあいつとよく話をしているからだろうか。
こうやって冗談を言って、梓をからかう事が多くなった。

「へーっくしょん！！」
「りょうくん、風邪？」
「パパ～、だいじょうぶ？」
「あ、ああ、大丈夫だよ。それより早く寝ようぜ」
「「三人で！」」
「はいはい……」

「……結婚か」
「どうしたんです急に」
中々寝つけないため、窓を背もたれに、梓と並んでひざを抱えて座っていた。
月明かりに照らされた梓は美しく、まさに天使と言う言葉が似合っていた。
それにしても……、ツインテールじゃなくて髪を流している梓も可愛い。
まったく、恋人時代が未だに抜けていないのか俺は。
「いや、つい梓にプロポーズした時の事を思い出したんだ」
「！！！」
そう、あれは……今と同じ、月が明るい、晴れた夜の事だったか。
結婚して４年たった今でもよく覚えている。多分梓も一緒だろう。

「綺麗だな、月」
「そうですね……」
あの高台。
俺と梓が結ばれた、あの場所。

梓と俺は今そこに座り、二人でべったりくっついて並んでいた。
しかも夜。雲が晴れ、綺麗な半分の月が、顔を見せていた。
「梓、話があるんだが……」
「なんですか？」
あれを渡せばいい。その言葉を言えばいい。既に了承はしてあるんだ。

「……あ～、そのだな……」
ダメだ、恥ずかしい。言えない。
どうしてだ！？あの時は言えたはずだろ。あんなにもするっと。

――梓と結婚したいって願いだよ。

――……父と母が許可したら、いいですよ……。

――本当か……？

――はい。だって、私も英樹さんと結婚したいですから。

あの後に言った条件は全て満たしてある。
勤め先も決まっている。決まっていると言うかもう既に働いているが。
俺と梓と……あと何人かは養っていける。
……まあ、まだ梓の両親には了承は得てないけど、多分ＯＫだろう。
「……梓、そろそろ……」
「はい？離れますか？」
「そうじゃない！……け、け……」
どうしてだ！？結婚してくださいって言えばいいだろ！
しかし口が言葉を開いてくれない。もう無理かもと諦めかけた瞬間だった。

「……結婚ですか？」
梓に言われちゃったよ。男としてこれほど恥ずかしい事は無い。
俺は溜息をついて、頭を抱えた。
「あ、その、ごめんなさい！……英樹さんが、あんまりにも言いにくそうだったから……」
「いやもういいさ。……梓、結婚、しよう」
「……約束してましたもんね」
「いいのか？」
「……はい」
満面の笑顔で、俺にそう言ってくれた。
久しぶりに泣きそうになったが、俺は耐えて、ポケットから小箱を取り出す。
梓はそれを見て、かなり驚いていた。俺はあえてそれを流し、その小箱を開けた。
「これって……」
「約束はしてたけど、どうしてもな」
そこには、白く輝く指輪が入っていた。
月明かりで、輝いていた。
俺はその指輪を取り出し、無言で微笑みながら差し出された梓の手を握り、その薬指に指輪を通した。
「……幸せになろう、梓」
「……はい！」
目尻に涙を溜めながら、満面の笑顔で頷いた。

「今思うと、なんで本当にはっきり言えなかったんだろう」
自分の情けなさに、泣きそうになる。
梓はそんな俺の肩に手を置いてくれた。

「いいですよ、結婚しようとは言ってくれたじゃないですか。それだけでも私は嬉しかったですよ」
「……ありがとう、梓」
その手に自分のを重ねて、共に微笑んだ後、再び眠っている自分の娘を見る。
相変わらず、すぅすぅと眠っていた。
「……似てますよね、咲」
「梓にか？」
「自分で言うのもあれですけど」
まあ、事実だもんな。
気にするな。
……そして、俺はあの日を思い出した。
今思えば……、あの日もこんな感じの月明かりだったな。

「はぁ、はぁ、はぁ……！！！」
走っている。夜の道を。俺は。
息が切れても、肺が潰されようが関係ない。俺はただ目的地に向かって走り続けていた。
汗はタラタラ出てくるし、体は熱いが、関係ない。
全力で走って、走って、やがて目的地にたどり着いた。
……それは病院。俺は走って夜間の出入り口に入る。
看護師の女性が走るなと言っているが、すいませんと謝りながら尚も俺は走り続けた。
やがて、目的の部屋の前まで来ると、下を向いて息を整えた。
病室のプレートには、『灘宮梓』の名前が。……俺は、ゆっくりとスライド式のドアを開けた。
そこにあった姿は……。

「……英樹さん」
赤ん坊を抱いて、ベッドに上半身を上げて起きていた梓の姿があった。
俺はゆっくりと歩みよった。
「……すまない！本当に悪かった！！」
頭を下げて、謝罪した。
本当は、仕事を抜けてでも、昼には着きたかった。
だがどうしても抜けれず、結局着いたのは夜。……我ながら情けない。
梓の声が返ってこない。嘘だろ、子供生んだ直後に離婚……？
そんな酷い事があるもんか。だが……ある意味そうなっても仕方ないかもしれない。
だが、梓はそんな残酷な事はしなかった。頭を上げてと言われたので、俺は上げる。
そこには、子供をこっちに差し出してくれている、梓の姿が。
「……抱いてあげてください。そうすれば、許してあげます」
俺は、恐れ多くもその赤ん坊を抱く。
……可愛い。これが、俺と梓の……子供。
色々と苦労はあったけど、生まれた、俺たちの子供。
眠っている赤ん坊の顔を見ていると、つい……、俺は涙を流してしまっていた。
「ど、どうしたんですか英樹さん……？」
「……ありがとう……、ありがとう、梓……本当に……！！」
震える体を必死に抑えながら、俺は最大限の感謝をこめて、一番頑張ってくれた梓にお礼を言う。
確かに、本当に色々とこの子が梓のお腹に宿るまで大変だったが、でも、ここまで来れた。
ここまでしてくれた。こんな、情けない俺なんかの為に。
「情けなくなんかないです」
「……梓……？」

「英樹さんも、必死に頑張ってくれました。色々と不便になった私の為に、一生懸命、仕事が忙しいのに。それだけで、私は十分嬉しかったです」
そんな、涙をポロっと流しながら言われても……。
だが、何も言えなかった。ただ俺は、ありがとうと、そう言った。
「名前考えましょう、英樹さん」
涙を拭いて、赤ん坊を梓に返す。
どうやら梓に抱いてもらいながら寝た方がいいらしい、この子は。
「女の子だよな？」
「はい」
名前……。
どんな名前がいいだろうか？
周りのみんなはどんな名前を付けていたか。
確か、唯は柚（ゆり）だったな。自分の名前と、あいつの名前を取って付けたんだったな。
親の名前を取るか……、二人の間に儲けたのだから、そういうのもいいだろうな。
……。
…。
「さき……」
「え？」
「あずさの『さ』と、ひできの『き』。合わしてさきだ。……どうだ？」
梓はしばらく目を瞑って、考え込んでいた。
やがて目を開いて、
「……ふふ、英樹さんらしいですね」
「悪かったな」
「褒めてるんですよ。……じゃあ、この子は、『さき』にしましょう。漢字はどうします？」
「そうだな……才能を咲かすと言う意味を込めて、咲はどうだ？」

「英樹さんが言うなら、そうしましょうか」
「……咲、今日からお前は咲だ」
眠っている、娘の頬を触りながら、愛する娘の名前を呼んだ。

「才能を咲かすか……本当に咲いてるかもな」
「凄いんですよ咲。この前ギターに興味がありそうだったからおもちゃのギターで色々弾き方とか教えたんですけど、これが結構凄くて！」
俺と梓の子供だからな。
ギターが上手いに決まってるだろ。
「親バカですね」
「お前に言われたくないさ」
ふふふ、と笑みがこぼれた。
本当に幸せだ。ああ、幸せだ。
あの時、好きだった人とは今は結婚、その人との間に出来た子供。
二人に囲まれての生活は、俺にとってはまさに楽園だった。
これから先も、3人で……いや、もしかしたら、また増えるかもな。
家族全員で、幸せに暮らすことができたらいいなと、俺は切に願っていた。

空には、いつも俺たちを見つめている、半分の輝く月が俺たちを覗き込むように、見つめていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2844n/

Family in the Moonlight　～月華の家族～

2010年10月9日02時40分発行